

石狩市文化財保護審議会・当日配布資料

- 1 答申「これからの郷土資料の保存・活用のあり方について」
- 2 厚田道の駅2階活用基本構想（たたき台）
- 3 厚田道の駅展示検討資料

平成 25 年 3 月 18 日 答申

答申「これからの郷土資料の保存・展示のあり方について」

(1) 石狩市のこれからの資料館について

1. はじめに

「郷土資料」とは、史跡、名勝、遺跡、歴史的建築物、民俗・歴史文化財、伝統芸能などの無形文化財、また動植物や化石などの標本、植生や生態系、地形・地質などの自然や景観などの自然遺産・文化遺産のことです。

郷土資料は地域の自然、歴史、文化を学び、伝えることの根底となるものです。長い歴史を経て育まれてきた石狩市民共有の財産であり、郷土資料の保存は、我々に課せられた後世への重大な責任です。そのことを踏まえ、諮問のあった「これからの郷土資料の保存・展示について」のうち「(1) 石狩市のこれからの資料館について」答申いたします。

2. 現状と課題

現在の石狩市は、平成 17 年に厚田村、浜益村と当時の石狩市が合併して生まれました。合併前の旧 3 市村にはそれぞれに資料館があり、いずれも地域の歴史を扱う郷土史資料館的な性格が強いものでした。そのため、合併後、石狩の資料館は郷土史や漁具、生活用具の展示に偏ってしまい、郷土資料の多様性に対応しきれていない状況が生じています。

また、当市の資料館に共通する課題として、本来資料館ではない施設が転用されていることに由来する施設上の制約があります。具体的には、十分な展示面積が確保出来ていない点、収蔵庫、研究室、作業室、講堂など資料館にあるべき施設がほとんどと整えられていないことが挙げられます。

そのうえ各施設は建設されてから長い年数を経過しているため老朽化が進み、温度・湿度環境や耐候・耐震能力などの点で、郷土資料を安全に長期間保管し、未来へ伝えることが困難な状況にあると言わざるを得ません。さらに、郷土資料を今後も新たに収集し保管していくには収蔵スペースが決定的に不足していると考えられます。

海辺にひろがる新石狩市は、道内でも屈指の歴史や文化と豊かで特徴的な自然を有する、魅力あふれるまちになりました。しかし、これまで郷土資料の保存・展示を担ってきた既存の施設には多くの制約と課題があるため、新しい石狩市として郷土資料の市内外への紹介や、資料や自然遺産・文化遺産どうしを関連づけたり、価値を再発見する試みも十分とは言えない状態です。

3. ネットワークによる郷土資料の活用

このような、石狩市の郷土資料の保存・展示における問題点を解決し、郷土資料がもつ価値を発揮させるには、必要な施設整備とともに、長期的、総合的な考え方に立った手法が必要だと考えられます。

それは、市内全域に分布する郷土資料と資料館、図書館、公民館などの社会教育関連施設がネットワーク化を進め、石狩市全域を「まるごと博物館」として活用することです。

この「まるごと博物館」のネットワークを作り上げるためには、次の四つの要素が重要だと考えられます。

1) 各地区に分布する郷土資料の整備

第一の要素は、石狩、厚田、浜益の各地区に所在する特徴のある郷土資料です。そのなかでも地形や植生などの自然遺産、遺跡や史跡、名勝、歴史的建築物、郷土芸能などの文化遺産は、各地区の独特の風土や社会と一体となっこそ、その価値が理解できる郷土資料です。これらに対しては、調査や研究を通して価値を明らかにすること、そして解説版の整備などによって、活用できる状態を作り出すことも必要だと考えられます。

2) 各地区の中心となる施設の再編

第二の要素は、石狩市全体のネットワークにおいて、各地区の中心となる施設です。この施設は現地での学習、展示の拠点となるもので、各地区の郷土資料についての情報を集約し、自然や歴史の概要を展示するとともに、地区内に分布する自然遺産・文化遺産の位置や内容、訪問経路を紹介する役割も果たします。

これらの施設は、当面、各地区にある既存の施設を活用することが現実的だと考えられます。そのためには各地区の特色を生かし、下記のように施設ごとの性格を明確にしたうえで、ネットワークの中に位置づけることが必要だと考えら

れます。

① いしかり砂丘の風資料館

海と川が出合う石狩川河口周辺の自然や、石狩発祥の地である本町地区を中心とする鮭で栄えたまちの歴史に関する展示を行うことが望まれます。

② 厚田資料室

厚田区には石狩市域の中でも特徴的な地層や化石などの自然や、油田などの産業遺跡が分布することから、自然史、産業史を中心とした展示が望まれます。

また現在は厚田区出身の歴史的人物を通しての厚田の歴史、文化に関する展示が行われていますが、こうした展示も厚田区の特徴を理解するうえで有効だと考えられます。さらに施設の役割については、観光など広く地域づくりの視点から検討することも有意義だと考えられます。

③はまます郷土資料館

建物が歴史的建築物である旧白鳥番屋であることを活かし、石狩市の歴史の大きな部分を占める鯨漁の歴史に関する展示が望まれます。また、展示の場所として区内の既存施設を有効活用することも検討することも望ましいと考えられます。

3) ネットワークの中核となる施設

各地区に所在する郷土資料を把握し、既存の施設の役割を明確にしても、課題となっている施設上の問題は残ります。そのため、三番目の要素として、収集保管、調査研究、学習などの機能を十分に持ち、ネットワークの要となる施設が必要になります。

そこは郷土資料の保存・展示の目的である、市民が郷土資料に関心を持ち理解を深めることができる場となるべきです。そのためには資料館だけでなく図書館、公民館、石狩浜海浜植物保護センターなどの社会教育関連施設との連携を図ることが重要です。特に図書館には一般的な図書のほか、石狩に関する多くの地域資料があります。ネットワークの中核施設は、図書館と連携することにより、市民に多様な郷土資料についての情報を総合的に提供できるようになるでしょう。

さらにネットワークの中核となる施設が、市内の郷土資料に関する情報が集約される場所になることは、石狩というまちが情報発信を行う上でも大きな意味を持ちます。

石狩市民だけでなく、市外からの来訪者にとっても、石狩の自然、歴史、文化を知るために最適な場所は、いわば「まちの顔」になるからです。

(※中核施設に必要とされる機能、設備などは、附編参照。)

4) 郷土資料の価値を伝える市民活動

各地区固有の郷土資料の価値を再発見し、伝えていく役割を担うのは、各地区に住んでいる市民です。市民自らが郷土資料について学び、現地を訪れる人々に価値を紹介し、さらに新たな郷土資料を見出すような活動が期待されます。そのため単に市民の参加を促すだけでなく、郷土資料に関心を持ち、保存・活用についての知識や技術を持った人材の育成を、長期的な視野に立ち、継続的に進めていくことが重要だと考えられます。

4. より良い郷土資料の保存・展示に向けて

答申の冒頭に述べたように、郷土資料とは石狩市の自然、歴史、文化を学び、伝えることの根底となるもので、長い歴史を経て育まれてきた石狩市民共有の財産です。

このような貴重な価値を持つ郷土資料の保存・展示が行われる場所は、その価値を発見し、理解する場所になるべきです。

そのため、郷土資料の保存・展示に対する行政の役割は、市民の財産である郷土資料の価値を明らかにするとともに、市民がこれを学び、伝えるための知的サービスを提供することであり、それが可能な環境を整えることです。

郷土資料を通して自らのまちを知ることは、自らのまちを愛し、誇りを持つことにつながります。より良い郷土資料の保存・展示が実現され、石狩市全体が、市民が知る喜びを味わい、自らのまちに対する誇りを持てる場所となることを希望します。

※付編：中枢となる施設に必要な機能と設備

1. 機能

中枢施設には、郷土資料を分類、整理して永続的に保管する機能、資料の調査研究によりその価値を明らかにする機能、郷土資料の価値や意味を市民に伝える機能、収集された郷土資料を使って学習活動を行う機能、郷土資料についての知識と技術を習得して保護や活用に関わる人材を育成する機能が求められます。

2. 体制

こうした機能を果たすためには、専門職員の配置が不可欠です。自然や歴史など複数の分野の学芸員が施設に常駐し、郷土資料に関する専門的事項に携わることが必要です。さらに、図書・文書に関する専門的業務やリファレンスサービスを担う司書、環境教育に携わる専門職員、市民の生涯学習活動をサポートする社会教育主事とも一体となれば、郷土資料の保存と展示、活用や、それらを支える人材育成において、大きな相乗効果が期待できます。また、これら専門的業務をバックアップする総務担当の職員も欠かすことはできません。

3. 構成

中枢となる施設の基盤であり最も重視されるのは、収集された郷土資料を分類・整理して永続的に保管する機能と、調査研究によって資料や標本が持っている意味を解明するための機能です。そのためには特殊な設備と耐久性、十分な面積が求められます。また、郷土資料の活用のためには、講演や、実物を使用し五感を用いた体験を伴う講座等のための実習室が必要です。さらに、市民が主体となった学習活動や調査研究活動、ボランティア活動の場として複数の研修室が必要となります。ところが、各地区の既存の資料館はいずれもそのような条件を満たしていません。郷土資料を守り、後世に伝え、それを担う人材を育成していくには、専用に設計された新たな施設の設置が不可欠です。

4. 立地

中枢施設は、市民の学習活動や人材育成のセンターでもあります。そのため、大勢の市民や多くの学校にとって、距離や交通の面からも訪れやすい場所にあることが望まれます。その一方で、各地区の中心施設との間を結ぶ交通の便がよく、また、市外から石狩を訪れる人々にとっては、石狩への入口として最初に立ち寄りやすい位置が望ましいと考えられます。さらに、郷土資料や図書、設備などを横断的に利用でき、専門職員同士が密接に連携できるよう、他の社会教育関連施設と隣接していることが重要です。以上の理由から、石狩市の「まるごと博

物館」の中核となる施設の設置場所は、花川地区内で、道道が交差し主要国道にも近い、市民図書館の隣接地が最適だと考えられます。

5. 設備

- ・収蔵庫：郷土資料を継続して収集し、恒久的に安全に保管できるもの。温度・湿度を安定して維持し、資料の活用の際に隣接した1000m²規模のもの。
- ・特別収蔵庫：特に安定した保管環境を必要とする資料のため収蔵庫。
- ・資料処理室：自然史資料や標本、状態の悪い資料等の処理、洗浄、加工等を施す作業に使用する。
- ・展示室：石狩市全域の郷土資料について概要を知ることのできる展示を公開。
- ・研究室：郷土資料に関する調査研究を学芸員が遂行するための室。
- ・実習室：実物資料に触れ、実体験を伴う体験講座を開催する室。
- ・研修室：市民の学習や研究活動、ボランティア活動の場。複数の室数が必要。
- ・ロビー：市民による企画展示や小集会、休憩等、多用途に使える場。
- ・その他：事務室、倉庫、共用スペース等。